

つながる ひろがる

萬鉄五郎展

— 菊坂の研究所に行き始めたのは、まだ早稲田中学に居た時分からだと思います。・・金澤重治君、数見君なども居ました。・・後に御厨君、清原君、北島、工藤、三國の諸君も入って来て一しよに美術学校に試験を受けました。

〔萬鉄五郎〕菊坂研究所の思い出『みつゑ』一九三五（大正十四）年九月号



《菊坂研究所記念祭余興飛び入り》1906（明治39）年頃

写真の裏面には「(向かって左から) 佐渡の三國久 房州の高橋信 東京金澤重治 東京大塚豊 北海道工藤三郎 根津萬鉄五郎」と記載

萬鉄五郎記念美術館



《会期》
2021年
4月24日〔土〕～7月4日〔日〕

《開館時間》
8時30分～17時まで（入館は16時30分まで）

《休館日》

月曜日（月曜が祝日の場合はその翌日）

《主催／会場》

萬鉄五郎記念美術館

岩手県花巻市東町土沢5-135 電話 028-0114
TEL 0198-42-4402 FAX 0198-42-4405

《入館料》

一般 / 500 (450) 円

高校・学生 / 300 (250) 円

小学・中学生 / 200 (150) 円

* () 内は20名以上の団体料金

《同時開催》
Iwate コンテンポラリーアート vol.10-1

村井俊二展《抽象絵画 PAINTING WITH CAMERA》

《会期》
4月24日〔土〕～7月4日〔日〕

《開館時間》
9時～16時30分

《休館日》

月曜日（月曜が祝日の場合はその翌日）

《会場》

萬鉄五郎記念美術館「八丁土蔵ギャラリー」

《入館料》

入場無料

※展覧会のスケジュール・内容は都合により変更、および中止する
場合がございます。ホームページをご確認ください。
<https://www.cib/hanarakiwate.jp/bunkosports/bunhai/yozutetsugoro/002101.html>

萬鉄五郎記念美術館



大下藤次郎著『水彩画之葉』新声社 1901 (明治34) 年初版

『水彩画の葉』という本の広告があったので早速買って読んでみた。何んだかその時非常に清新とでもいう様なそそられる様な感じを受けた。著者は即ち大下藤次郎という人である事を知ったのである。青梅に落着かれた時に絵を持ってお訪ねした事がある。如何に天分が豊富でも洋画家は絶えず窮乏と戦う覚悟が必要である事を繰り返し注意された。『水彩画の葉』(一九三三年十月号)



大下藤次郎『風景(秋の野)』1900 (明治33) 年 水彩・紙



『アトリエの萬鉄五郎(小石川)』1911 (明治44) 年頃 写真

そこからの萬鉄五郎の「画室」で、足の踏み場もないまで、たくさになつた画布、画布、画布の泥濘の中に、椅子とテーブルを控えて、顔色の蒼く瘦せていた萬は、口ひげばかり目立って濃く、のどをぐるりと巻いた毛糸の黒ジャケツを着て、日中というのに部屋には白熱瓦斯がともり、そのマントルが横つちよになつて、フラフラしていた。



小林徳三郎『静物(ひょうたんとレモン)』1931 (昭和6) 年頃 油彩・画布

色彩が非常によく、なれて装飾の意味に徹して居る。彼の絵は決して技巧のうまい絵とは言えないが、却つてその正直な見方に徹して行く一見拙そうな処に芸術としてのほんとうの尊さがある。



萬鉄五郎『茅ヶ崎に参上 森田勝と小生(原精一) 裸の先生應對される図』1925 (大正14) 年 墨・紙

一九二二(大正一一)年頃から、藤沢の藤嶺中學生だった森田勝と原精一、鳥海青児らが、茅ヶ崎の萬の自宅を訪ねるようになる。一九二五(大正一四)年に森田と原が、第二回湘南美術展(平塚)の出品交渉に萬の画室を訪れた場面を描いた戯画。本作を基にした作品が『中央美術』に掲載されている。



金澤重治『萬鉄五郎のデスマスク』1927 (昭和2) 年 鉛筆・紙

萬鉄五郎記念美術館 岩手県花巻市東和町土沢 5-135 TEL.0198-42-4402・Fax.0198-42-4405

明治末から大正期をとおして、新たな時代を切り開いた画家、萬鉄五郎。後期印象派からフォーヴィズム、抽象表現やキュビズムと西洋の新思潮を受けて、個性的な独自表現を展開しました。そこには師の教えや画家仲間との交流など多くの出会いがあり、その一つひとつが彼の歩みを支えていったといえます。

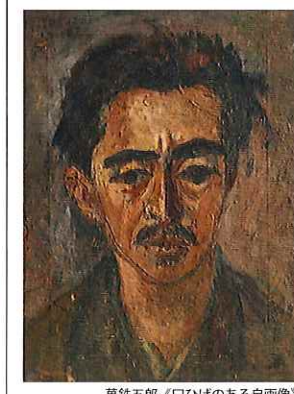
つながるひろがる 萬鉄五郎展

萬を慕う画学生たちとの交流も次世代の表現者を育み、なかでも同郷の画学生だった橋本八百二の心酔ぶりは作品を覗けば明らかです。さらに、間接的ではあっても棟方志功のように、へたくしは「萬鐵に首つたけ惚れて」いるのだ。仕方がないほど、参っているのだ。と、その心酔ぶりは他に類を見ないほどです。



橋本八百二『人形を配せる静物』1926 (大正15) 年 油彩・画布

小学校担任教師の大川英八が萬鉄五郎と交遊のあった関係で、東京美術学校在学中の橋本八百二は萬に傾倒する。色彩、フォルムともに萬と見まごう作品を多く描いている。



萬鉄五郎『口ひげのある自画像』1914 (大正3) 年 油彩・画布 (棟方志功旧蔵作品)

わたくしは「萬鐵に首つたけ惚れて」ゐるのだ。仕方がない程、参っているのだ。…… 絵の全てに於いて「萬鐵」の行状は、真実なる「画人」であるばかりだった。



棟方志功『萬鐵の繪心 直筆原稿(一部)』1952 (昭和27) 年 ペン・紙

未だ集まつてこない親類の方々に見せる為に、死に顔を写生してくれと依頼された。白蛾のように白く普段と変わらなず肥っていたが、幾分眼だけは落ち込んでいた。萬さんの死顔を写生する様に成ろうとは思いがけない事に成るものだ。

金澤重治『萬君の死の前後』美術新報 一九二七(昭和二年八月号)



萬鉄五郎『松島屏風』1918 (大正7) 年 油彩・画布 (二曲一双)



川上涼花『草花園屏風』1918 (大正7) 年 紙本着色・二曲一双

掲載図版は全て萬鉄五郎記念美術館の所蔵及び寄託作品